

# 小説

## 小松文芸賞

【自由作品】

### 福良祭り

ドンドンカンカン、

ドンドンカンカン、

ドンドンカンカン、

ドンドンカンカン。

九月十一日は、福良港の本祭である。

福良港の四地区（町波、水の間、丹和、日和山）の太鼓と鉦の音が湾内に響き渡っていた。音は交錯しながら、不調和なままに一つの大きな塊となつて、海風に乗り、山々に響き渡つて行く。

湾内は祭りを見ようと、地元民や観光客で賑わっている。

その日の午後二時ごろに猿田彦神社から出た神輿は、右湾を通り、恵比須堂の下まで神幸する。そこから神輿は底引船の神様船に鎮座する。神様船は、猿田彦命のお面をつけた水先案内人を乗

せた船に引かれるように港を出て行く。

神様船の後に四地区の鉦と太鼓を乗せた船が続き、さらに地元老若男女を乗せた船が連なつて行く。鉦や太鼓の音が秋風に乘つて湾内に流れて行く。神輿の屋根の鳳凰が、秋の陽を浴びて眩しく輝いていた。

神様船が大崎の辺りまで出て行くと、波のうねりは大きくなり、祭り幡が音を立てて靡く。鳴り響く鉦と太鼓の音が、大海原に拡散し日和山の金比羅神社まで響いてきた。

澤田寿子は村人に交じり金毘羅神社の高台の広場に立ち、大間から水の間に入る神様船の一行を眺めていた。

十年前に見た神様船の渡海の景色とは、神様船が変わっていた。後に繋がる船も昔と違っている、と思いながら旧灯台の方に足を

坂ノ下栄仙

向けた。

神様船が沖で右転回し水の間に入るころ、太鼓や鉦の音は、波が岩に弾ける音に変わっていた。

旧灯台の周りには、ハマギクやノコンギクが咲いていた。

寿子は旧灯台に背を預けると、十年前のことが蘇って来た。

初めて男の人と口づけをした場所、あの感触が思い出され、そつと唇に指をあててみた。

山下達夫は、その時のことを覚えていたのだろうか。きっと忘れていただろう。私のことも遠い過去の出来事、祭りでのハプニングぐらいのことにしか記憶にないのではないかと思ひながら、少しは記憶に残っていてほしい、とほのかに思う寿子であった。

水平線が霞んで見える。カモメが数羽、鳴き声を上げ、海風に吹かれながら水面の魚を狙っている。

寿子は、神様船が水の間に入って行くころ旧灯台を後にした。

神様船は水の間に入り、御待屋に一旦落ち着く。その御待屋に入る時、「エツテコイ」と呼ばれる数人の若者たちと、神輿が押し合いをする。

山下達夫も高校生の時、大人たちに交じり御待屋に入ろうとする神輿を、押し返す役をしたことがあった。達夫の神輿担ぎの男たちになぎ倒されても向かっていく勇猛さ。祭りならではの光景に寿子は、面白さと男くさを感じ、ほればれとしたことがあった。

達夫に惹かれて行ったのも祭りのせいかもしれない、と思うことがある。

達夫は、今回は神輿担ぎなので、反対に神輿を入れるために踏み張りを見せていた。達夫は前から四番目を担いでいた。元氣よく走り込んでいた。まだ若々しい達夫を見て寿子は嬉しくなった。

高校生のときの達夫と大人になった達夫、比べてみたがどちらもきらいではなかった。

神輿がしばしの休憩をとり、水の間町内の四、五軒の御招待宅を回り、恵比須堂に立ち寄って町波町内に入る。

その頃になると薄闇が湾内を覆い、四地区の太鼓と鉦が鳴り響いて来た。そしてオワカシ（法燈・キリコ）が四地区から出て来た。

祭りの当番地区のオワカシは、神輿の前を行き、道を照らす提灯の役目をするためにロウソクの光を一杯に輝かす。

そのころ町波の町内は闇夜に覆い尽くされるが、祭りの熱気と賑やかさで沸き立っていた。

山下達夫は、大学二回生のころまで毎年祭りに参加していた。三回生になると、勉強やアルバイトで多忙になり、祭りの日に休みがとれなくなった。それ以後、祭りの日程を忘れるように年を積み重ねてきた。

ここ二、三年、和田佑児と正月に酒を飲みかわすと、祭りの話になり神輿担ぎに誘われるのである。

昔から福良に生まれた男ならば、一度は神輿担ぎをすることが役目のようになっていた。

達夫が二十前後のころは、地元で担ぎ手が多く、達夫には声がかからなかった。ところが、近年地元に残る若者が少なくなり達夫にも声がかかるようになったのである。

佑児の誘いもあり、幼馴染も何人か一緒に担ぐ、というのでチャレンジしてみることにした。それでも達夫は、今一つ自信がないまま神輿担ぎを承諾した。決め手は、寿子が祭りを見に来るかもしれない、と聞いたからである。会いたい。いいところを見せたい。そんな願望がうごめいたせいもある。

当日、達夫は小中学校の同級生の林勇や和田佑児、飯塚誠など

と担ぐことになったが、初めてのことでもあり不安を拭いきれなかった。大抵の男たちは、二、三回担いでいた。結婚してからも福良に残っている三十代の男たちも、担ぎ手として名を連ねていた。

神輿担ぎが決まってから祭りまでの数か月、中学生時代に携わったオワカシ作り。オワカシの障子やぼんぼり張り、組み立てなどの準備や作業。高校時代祭り唄を歌いオワカシを担いだこと、酒を飲んで友たちと肩を組んで騒いだこと、そして澤田寿子との思い出。それまで忘れていた思い出が、水の中に溶けていたような記憶がふつふつと蘇って来た。

澤田寿子は、今、何をしているのであろうか、もう会うことはできないのか、会いたい、という思いが募るのであった。

十年前達夫と寿子は祭りの後、何度かデートをしたが、受験の時期に入ると、思いを告げぬまま西と東に分かれることとなった。山下達夫は澤田寿子に初めて異性を感じ、好き、という感情を持ったことは確かなことであつた。しかし寿子の確かな気持ちを聞くことなしに離れ離れになった。

達夫は大学に入り、新しい環境に翻弄される日々の中で寿子の存在が遠のいていった。

大学では、幾人かと付き合うことがあつた。だが別れるたびに澤田寿子のことか思い出された。連絡を取ろうとしたこともあつたが、今更、という気持ちに先に立ち何もしなかった。寿子への想いは、くすぶつたまま火鉢の灰の中に、火種を埋めて行くようなことをしていた。

隣の澤田寿子は、高校三年生の時、同じ高校に通っていた中村静子に誘われて、その年の福良祭りを見に来ていた。寿子は静子と一年生の時から同じクラスで、クラブも同じであつた。

家庭環境もよく似ていて、両方の父親は外国航路の乗組員同士

であつた。そんな二人が高校に入り一層仲良しになったのは当然の成り行きであつた。

静子は丸顔で、眼が丸く可愛い顔立ちの女の子であつた。寿子は静子より5cmほど背が高く、面長の鼻筋が通つた美人顔であつた。

そんな二人は、異性から声を掛けられることもよくあつたが、振り向くことはなかった。

静子と達夫は、保育所から中学校まで同じクラスで勉強した幼馴染である。それに静子の父と達夫の父は、同じ商船に乗っていたこともあつたので、小さい時遊んだこともあつた。それでも高校を卒業してからは、数えるぐらいしか会っていないかつた。

同じ在所であつたが、静子は名古屋の大学に進学し、そのまま名古屋で就職した。お盆か正月ぐらいしか帰郷しなかつた。

達夫は京都の大学に進学したため、大学在学中もほとんど会うことがなかつた。時たま帰郷した時、静子の動向を聞くことがあつた。

その年、達夫が五月の連休に祖父の法事に帰省した時、静子が赤ちゃんを連れて里帰りしていることを知つた。

それでなんとなく懐かしくなり、法事を終えた次の日に、達夫は金毘羅神社の近くにある静子の家を訪ねた。

静子は、縁側で赤ん坊を抱いてミルクを飲ませていた。

久しぶり、と笑顔で話しかける達夫に、

「あら、誰かと思つたら、たつちゃんじゃないの……」

静子は驚いた顔をし、赤ん坊の哺乳瓶を放して手に持った。赤ん坊は口をもぐもぐさせながら、ミルクをせがむ。

静子は、ごめんごめん、と言いながら赤ん坊の口元に哺乳瓶の先を持つていく。

「こつちこそ、ごめん、突然訪ねたりして……なんとなく懐か

しくなつてね」

「いいのよ。ありがとう、うれしいわ。何年ぶりかしら」

と静子は、笑顔を崩さない。静子は母親になったせいか、高校生時代よりも体つきが丸くなり、少女から大人の顔つきになっていた。

「ここに座つて。久し振りね。今、何しているの」とまじまじと達夫を眺めて話してくる。

「お前は、幸せそうだね。一人目か」

「そうよ。あんたは、彼女いないの?」

静子の表情に、ちらつとほこらし気な色が動いた。達夫は軽く首を振る。

「そう、もてそうじゃない。たくさん、泣かしてきたんじゃないの?」

「それでもないが、まあ、いろいろあるわさ」

それから一時間ばかり、達夫と静子は昔話をし、近況を報告しあつた。

静子は、今は金沢の銀行に勤め、職場結婚をしたとのこと。金沢で暮らしている、というのであつた。

達夫は大学院まで出て、京都の私設美術館の学芸員をしていることを話した。その美術館は、ある関西の財界人が集めた陶器や日本画、古美術品を所蔵していた。

達夫は、大学時代からその美術館でアルバイトをしていたので、その学芸員の欠員が出たため運よく滑り込めたのであつた。

達夫は、大学で民俗学を研究していた。

達夫の研究は、伝統文化と祭りの変遷や時代の特徴、風土と神仏の関係について分析し紐解く研究であつた。

祇園祭の曳山などの変遷や祭りとの関係などにも注目し、小松の曳山など全国の曳山のルーツや祭りとその土地の風土の関係を

掘り起こし、類似性と違いを検証していた。

それに奥能登から中能登に分布する「法燈（キリコ）」のルーツや変遷も研究していた。

福良祭りでは、昔から奥能登地方で言われている法燈（キリコ）を、「オワカシ」と呼んでいた。

達夫の持論であるが、夜を徹して法燈を担ぐ「夜を明かして」担ぐことから、「よわかし」の音がにごつて「おわかし」になつていったのではないか。昔から夜を徹して一晩中する祭りゆえに、オワカシとなつたと、推察している。

それに法燈のルーツは、青森の「ねぶた」ではないか、とも思われる。

ねぶたの起源を探ると、『奥民図彙』の「ネムタ祭之図」には、角型の灯籠に絵や文字が描いてあり、十数人で担いでいる絵が残っている。これが北前船の時代、青森から能登に伝播したのではないか、と達夫は推論している。日本海沿岸の港町の灯籠祭りを詳しく調べなくてははつきりしたことは言えないが、その仮説は当たらずとも遠からず、と達夫は考えている。

達夫は子供をあやす静子を見ながら、仕事のことや生活のことを掻い摘んで話した。

私も美術館や博物館に行くのは好きよ。寿子とこの間、県立歴史博物館に江戸後期の浮世絵を見に行つて来たよ、と言うのである。

寿子という名前が出てきたので、達夫は寿子のことを訊くことができた。

静子の話によると、寿子は金沢に帰つて来て、高校の英語の教師をしているというのである。

今年は、静子がお産で里帰りしているというので、寿子を祭りに誘つたとも話す。

それで寿子は、久しぶりに福良祭りに来るようになった。達夫が神輿を担ぐかもしれない、という話もあり、思い切つて来たのであった。

十年前の本祭りの夜、寿子は達夫と軽く触れた唇に興奮していた。寿子は達夫の唇の温かさを、今でも覚えていいる。それは初めてのことであったせいもあるが、達夫の震える手の温もりのせいかもしれない、と思うのである。

達夫にしても初めてのことであつたが、どの程度重ねねばいいのかわからず、恐る恐る触れた寿子の唇、その温かさを感じることもない十数秒の出来事であつた。

祭りの夜、静子の家で初めて会つた寿子と達夫は、互いに惹かれるものを感じた。一緒にオワカシを担ぎ、祭り唄を歌い、少し酒も口にし、心も体も火照り開放感に浸つた

寿子も達夫もはじめて異性を意識したのは祭りの雰囲気のおかげかもしれない、とデートを重ねる中で思うのであつた。それが恋かどうかともわからなかつたし、好きと言う感情だけが先走つていた。愛しているという意識も希薄に思えた。ただ言えることは、互いに異性を意識し、何を好きなのかはつきりしないまま一緒にいたい、という気持ちだけだつた。

十年前、神輿が水の間の御待屋に入るための「エツテコイ」。

それに参加していた達夫は、神輿担ぎの男たちになぎ倒されても勇猛に向かつて行く。祭りならではの光景に寿子は、祭りの面白さと男くささを感じ、忘れることはなかつた。

それまで寿子は高校男子のたくましさや男くささに、魅かれたことはなかつた。が、祭りの時に見せる男たちの威勢の良さと猛々しさに、惹かれるものがあつた。

寿子が達夫に惹かれて行つたのは、祭りのせいだけではない。達夫に一目ぼれをしたせいかもしれない、と思うことがある。

寿子は東京の大学に進学し、達夫は京都の大学に進んだ。入学当初、二・三通の手紙のやり取りをしたが、二年目になると音信不通になつた。

寿子は二年生から英文学の専門に入り、中世の「ペーオウルフ」のような英雄叙事詩や、ジェフリー・チョーサーの「カンタベリー物語」の作品などに興味関心が高まり、それに時間を割くことが多くなつた。

二年生の時、同じクラスの男の子と付き合つたことがあつた。別れてみると達夫のことが思い出される自分に気づく寿子であつた。

三年生を終えると、イギリスのエディンバラ大学に一年間留学した。その時、イギリス人の男性と半年、同棲したこともあつたが、結婚に至らなかつた。別れ際にまた、達夫の顔が浮かんで来た。どうしているんだろう、と思うことがあつた。だが、達夫の動向を探ることはしなかつた。今更、という気持ちが先に立つたこともあり、傷つきたくない、という気持ちが底にあつた。

帰国後、大学院の修士までいった。研究者の道は狭き門とわかり、地元の高校の英語教師となつたのは三年前のことだつた。

寿子は高校で英語を教える傍ら、金沢の私立大学で英文学の非常勤講師もしていた。

親からは三十になる前に結婚をと促されていた。二十七歳の時、上司に紹介された大学教員と見合いしたことがあつた。見合いの最中に、心の中に達夫が棲んでいるもう一人の自分に気づかされ、踏み切れなかつた。

その後、もやもやとした気持ちを胸に仕舞い込み、自分を日々の仕事に追いつ込んでいった。その後、これといった男性に巡り会うこともなかつた。

今夜、達夫に会えるだろうか。静子から達夫が神輿担ぎをして



いることを聞いていた。

寿子は達夫に会える最後のチャンスかもしれない、何もしない  
で後悔するよりも当たって砕ける、という気持ちで福良祭りに来  
たのである。多分、ゆっくりと話すことはできないかもしれない  
が、顔ぐらい見ることができさるだろう。そして一言、ずっと忘れ  
ることがなかった人はあなただけ、と言いたい。そう考えると、  
自分の顔が火照るのを感じる寿子であった。もしかして私のこと  
が分からないのではないか。達夫は、どんな風になつてゐるだ  
ろうか。不安が尽きない寿子でもあった。

神輿が町波地区に入ると、オワカシの数も増え、祭りは一段と  
賑やかになつた。

町波地区を神輿が練り歩くころになると、達夫は肩が腫れ上が  
つて来ていた。まだまだ先は長い、と前で担ぐ佑児が励ましてく  
れる。が、達夫の口からため息が漏れた。

達夫は祭りの前に、静子から寿子も祭りに見に来ることを聞い  
たので、時折、担ぎながら観客の方に目を向けることもあった。  
寿子は目に入らなかつた。それでもどこかで寿子は自分を見てい  
るような気がしていた。神輿の重さが肩にかかることに、寿子の  
ことを思いがはんばる達夫であつた。

神輿が福浦漁業組合で御招待を受け、小休憩をする頃、町波の  
福専寺の広場では、四地区の鉦と太鼓、オワカシが集まつて来  
た。太鼓や鉦の音、オワカシ担ぎたちの祭り唄が入り乱れわんさ  
かと盛り上がりつゝいた。広場の暗さがオワカシの口ウソクの光と、  
家々の縁側の提灯の光で、ボーッとした明るさを醸し出し、妖艶  
な雰囲気あたりを覆つていた。

小学生の祭り唄が響く。

「福良間口に蜂が巣をかけて、船が出りやさす、入りやさす」

太鼓や鉦も合わせる。

「丹和坂から大間をみれば、漁師船やら機械船」

それを受けて、高校生が声を張り上げる。

「恋に焦がれてなくセミよいか、鳴かぬ蛭が身を焦がす」

中学生の男女も負けじと歌うのである。

「能登の福良のひっぱり餅は、誰が引くやらきれやせん」

「能登の福良の腰巻地蔵は、今朝も出船をまた止めた」

と、オワカシの周りでそれぞれが声を張り上げて唄う三十数曲。

太鼓や鉦、祭り唄が混ざり合い漆黒の空を駆け巡る。熱気が夜  
の寒さを跳ね返していた。

寿子はそんな祭りの風景を見守りながら、達夫を初めて見た時  
のことを想い出していた。

寿子が高校三年生の時、福良祭りに見て驚いた。こんな祭りは、  
自分のところになかつたからである。

達夫たち高校生も酒を飲み、オワカシを担ぐ合間に、四、五人  
が肩を組んで、卑猥な唄「べべのしたがる十七、八……、よんべ  
よがらつて瓦場にねーたら……」などと、歌い飛び回つていた。

祭りならではの光景と、大人たちも祭りゆえのこととして、大目  
に見ているようだった。それも十年ぶりの祭りには、時代を反映  
してか、羽目を外す高校生はいないな、と寿子は昔を懐かしく思  
いながら今の祭りを眺めていた。

達夫は、神輿が町波地区から日和山地区に入るころには、寿子  
への意識は薄くなり、それ以上に肩はしびれ、腰も重くなつてき  
ていた。

他の担ぎ手たちも、休みに入ると達夫と同じように肩は腫れ、  
休憩に入るたびに肩をもみ腰をさすり、麦茶を片手に握り飯を頬  
張るのであつた。

金毘羅神社での「エッテコイ」では、達夫の足がもつれ、転びそうになった。それでも皆の気力で四回目で御待屋に神輿を納めた。

神輿担ぎたちは、日和山会館に入り一休みすることになった。

達夫たちも会館の縁側に腰を下ろした。

「ここで、二十分ぐらい休めるぞ」

と、佑児が励まし、労わりの気持ちを込めて栄養ドリンクを差し出す。まだ先は長いゆえの飲み物である。

「これで気力回復！ 体力回復だ！」

とみんな栄養ドリンクで乾杯をする。

「助かった。まだ、半分だよな」

「達夫、これからがしんどいんだよ」

「誠の言う通り、これからが勝負だ」

「勇は、二度目だから少し慣れているやろ」

「達夫、一回ぐらいで慣れるもんか」

と勇は握り飯を頬張る。後の三人も巻き寿司を口に入れる。

「お前、もつと楽に思っていたんじゃないか」

「佑児がこんなにしんどいと、話しなかったもんな」

誠は達夫の肩をなでながら、

「しんどい話を聞いたら、担いだか？」

達夫が首を下げながら、そうだな、と頷く。誠も勇も笑う。

四人は少し腹に収めると、気力が戻り仰向けになり天井を仰ぐ。

四人は、暫く口をつぐみ目を閉じた。

しばらくすると、

「達夫君、大丈夫、先は長いわよ」

と、達夫に声が掛かった。

達夫は、ええつ、と声を出しながら起き上がった。

そこにふくよかな若い女が、軒先に立っていた。少しはにかみ

ながら達夫を眺めている。

「もしかして寿子さん？」

寿子はそうよ、と言いながら自分を忘れていないことに安堵した。久しぶりね、と微笑むことができた。

グリーンのワンピースに黄色のカーディガン姿。大人になった寿子に戸惑いを感じながら、達夫は驚きを隠せず、

「ほんと、元気そうだね」

「私は元気よ。静子に誘われて、久しぶりに祭りに来たの」

「そうか、本当に久しぶりだ、会えるとうれしいなあ！」

達夫の顔が疲れが吹き飛ぶかのような火照って来た。会いたかった人に会うことができ、気持ちが高ぶるのであった。

「私も達夫さんに会えて嬉しい」

誠や勇が、

「達夫、なんだなんだ、お前、やるね！」

達夫は軽く頷く、佑児が驚いて、達夫の頭を叩くのであった。

それからしばらく達夫は三人と離れ、寿子と会館の隅に行って話すことができた。

寿子は胸の内からこんこんと湧き上がって来るものに衝き動かされながら、思い切って明日会いたい、と達夫に告げた。

達夫も長く埋もれていた埋火が、一気に火照り出すかのように、自分も会いたい、と返事した。二人は次の日の午後に、旧灯台で会う約束をした。

達夫には、疲れを吹き飛ばすぐらいに神輿を担ぐ勢いが戻って来た。しかし疲れは心と裏腹に重く重なうって行った。

神輿は日和山地区から丹和地区に入り、御招待の家々を回り、新開地から新道を通り、町波地区のドンニヤチ地区を周り、そこから神輿をトラックに載せて和光台地区へと回った。

その頃には、達夫はほとんど疲れていたが、寿子のことを思う

と、よたよたの足にも踏ん張りがあった。肩は腫れ上がり、痛さもマヒ状態になり、パンパンに腫れてきていた。

寿子は金毘羅神社の前で達夫に会ってから、丹和地区の会館まで、神輿について行ったが、そこから静子の家に帰った。

寿子は、達夫と再会でできて心が満たされていた。それに憂慮することもなかった。達夫も自分を覚えていたことに喜び、夜の寒さもさほど身に応えることはなかった。

静子の家に帰り、床に入って達夫のことを思うと、気持ちけ明日の午後に飛んでいた。

何度も寝返りを打っていたが、眠りの海に沈んで行ったら、神輿は神社に落ち着いた。

神社に入る時、神輿担ぎの面々の足取りはもつれ、止める若者も四、五人となり、力なく形ばかりの「エッテコイ」となった。

神社に入って達夫は、心身困憊の状態で最後の祭り唄を歌う。眼が半分閉じている状態になっていた。

達夫が自分の床で眼を覚ましたのは、もう午後の一時過ぎだった。

寿子は遅い朝食を済ますと、静子に達夫と話すことができたかと聞かれた。

「うん、何とかね。今日の裏祭りが終わってから、会うことになったわ」

「よかつたんじゃない、どこで」

「旧灯台……」

「うれしそうね。十年ぶりぐらいだもんね」

「これも静子のおかげだよ。本当にありがとう」

と何度も頭を下げる寿子であった。そして、嬉しさを隠せない

寿子は、待ったわ、と言う。

「やっとの巡り会いだね」

と静子は、寿子と達夫の再会を喜んでくれるのであった。

午後の一時を過ぎるとドンドコ、チンチンと太鼓と鉦の音が、四地区から鳴り響いて来た。

裏祭りの一行が列をなして現れた。

猿田彦神社までの行列は、それぞれの会館で行われたご招待のお供え物を地区の代表が持ち、鉦や太鼓を引き連れ、祭り唄を歌いながら若者たちは旗竿を持ち、子供たちは旗竿から垂れ下がった藁縄を持ち、太鼓と鉦に合わせて調子をとりながらついて来る。そして、その行列の最後にいろいろな仮装をした村人も祭り唄を歌い、太鼓や鉦に合わせて空き缶を叩き祭りを盛り上げた。

それは北前船時代から女郎たちが裏祭りに参加して来た名残りののである。

四地区がそれぞれ大人も子供も仮装に工夫を凝らし、裏祭りを盛り上げていた。毎年、どこもバラエティーに富んでいた。男性が女郎姿の衣裳や女性のドレスを着こみ、女性が相撲取りや武士マンガの主人公などに化ける。特に丹和地区の人々の仮装は飛びぬけて面白かった。

静子と寿子は、福専寺の前で見物した。

「いや、昔もびつくりしたけれど、今年もすごいね」

寿子は笑いをこらえながら、静子に話す。

「これが福良祭りなのね。こんな祭り他にないでしょう。県内には、こだけじゃない？」

「たぶんね。神輿を船に乗せて、港から港に渡るのは、他にもあるけれど、福良の神輿担ぎは厳粛に神輿を担ぎ、暴れるところもないし……神輿傘でもあるものね」

と静子が言う。と、寿子がうなずく。

「それに神輿担ぎの祭り唄があるし、オワカシの祭り唄もあるのは、ここだけかもしれないわね。富来町無形文化財になっ



るわ」

寿子は、福良祭りを再認識するのであった。

「福良祭りは、北前船時代の影響をたくさん受けているんじゃないかな。それに盆踊りの唄も福良独特の唄があるしね」

静子はしみじみと話すのであった。

それからしばらくして、寿子は約束の二時半ごろに旧灯台の前に立った。

海の青さが昨日よりも濃いように思えた。うさが跳ねるように白浪が立っている。風は昨日までとは違い秋の気配を漂わせ、いわし雲が流れていく。

午後の日差しが寿子の黒髪を輝かし、海風が乱す。達夫はまだ来ていない。

昨晩の約束をはたして覚えているのだろうか。確かな時間を約束したわけではない。三時ごろと大体の時間を言ったのに過ぎない。明け方に神輿が神社に入った、と聞いていたから、きつと、へとへとになりまだ眠り込んでいるのではないか、起きられるだろうか。次第に心配になると同時に、会って何を話そうか、と高揚する心を抑えようとしている時、

「ごめん、ごめん」

達夫の声が流れる風を引き裂いた。寿子は振り返る。その顔は清々しく美しい、と達夫には思えた。

寿子と達夫は、旧灯台を背景に石垣の上に腰を下ろした。二人はしばらく、黙って海を眺めた。

達夫がおもむろに手を差しのべた。寿子はその手を握り返してにじり寄り、達夫の胸に身体を投げ込んで来た。達夫は寿子の肩を抱き、静かに唇を重ねた。

寿子の身体の中を火のようなものが走り抜けた。陶酔が波のように次々と打ち寄せ、寿子の手足の力が失われた。十年前の唇の

温もりが蘇って来た。

二人が顔を離れた時、

「ここからまた、始めよう」

と達夫がささやいた。

寿子は、頷き、達夫の唇を求めていった。

※参考文献 『客人の湊、福浦の歴史』

